

2026年4月19日 第二礼拝

説教題『階段を降りていわれる主』使徒言行録22章6～16節

主任牧師 加藤 誠

「わたしは地面に倒れ、『サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか』という声を聞いたのです。」(使徒言行録22章7節)

今日「旧約聖書をどう読むか」という問いは、キリスト教会に向けられている大切な問いです。例えば、旧約聖書を「イスラエル・ファースト」の書として読む立場があります。「神に選ばれ、神の律法を充実に守るイスラエルが第一。世界はイスラエルによって祝福される。だから異教徒たちはそのイスラエルに従うべきである」という信仰であり、ガザ地区への軍事侵攻を聖書で正当化する信仰です。

それに対して「神の愛・ファースト」を中心に旧約聖書を読む立場があります。聖書の「厚み」は人間の罪の歴史の「厚み」であると同時に、神の愛の「厚み」であると受けていく読み方です。神の愛をもって創造されたのに、その神の愛から離れて愚かな罪を繰り返す人間のことをあきらめることなく祈り続ける神の愛。聖書には最初から最後まで、その神の愛が貫かれている。イスラエルが選ばれたのは、強さを誇るためではなく、彼らの弱さと小ささにおいて、すべての人が神に愛されていることを知るための選びだった…と理解する立場です。

主イエスは、その神の真実の愛を体現して生きられました。人びとの賞賛ではなく、人の目に小さく見えるものにあふれる神の恵みに気づかせてくださいました。「守らねばならない」と人びとを縛っていた旧約聖書の律法の多くを廃棄されましたが、それはけっして律法そのものを捨てられたのではなく、律法の中心である「神を愛し、隣人を愛する」という教えをはっきりさせるためでした。「イスラエル・ファースト」の信仰が人と人との間に「隔ての壁」をつくり、対立と分断、憎悪を生み出していく道であるのに対して、「神の愛・ファースト」の信仰は、お互いの心にある隔ての壁を砕かれて、神の愛を分かち合っていく道です。わたしはこの「神の愛・ファースト」の信仰こそ、希望の命の道だと信じている者の一人です。

今朝の使徒言行録22章で自分の回心について語っているパウロは、かつて「イスラエル・ファースト」の信仰に邁進する若者でした。それは自分は正しいと絶対化し、階段を上り、栄光を求めていく道でもありました。パウロは多くのキリスト教徒を迫害してその命を奪いましたが、神の前に正しいと信じているゆえに罪悪感から守られていました。誤った信仰は人の良心を麻痺させて罪悪感を感じないようにさせる、麻薬のような一面があることを私たちはきちんと見なければなりません。

ところが、そのパウロが十字架の主イエスと出会い、その信仰を根底からひっくり返されてしまうのです。この時のパウロは、主イエスから「お前はいったい何をして

いるのだ！」と一喝され断罪されてしかたない者であったにもかかわらず、主イエスは御自分の「正しさ」をもって上からパウロを裁きません。パウロに心に語り掛け、アナニアのもとに導きます。パウロは、「敵」である自分のもとにわざわざやってきて、自分に手を置いて癒しを祈るアナニアを通して、自分のために祈り続けおられる十字架の主と出会います。「イスラエル・ファースト」の信仰が上昇と栄光を求め、「敵」を上から見下す信仰であるのに対して、「神の愛・ファースト」の信仰は、自分の正しさにとどまることなく、自分を敵視する隣人のところに階段を降りていく道です。主イエスは上からパウロを裁くのではなく、パウロのところまで「階段を降りてきて」、愛と赦しと祈りを届けてくださったのでした。アナニアの祈りを通して心の目を開かれたパウロは、アナニアを遣わされた十字架の主の愛の祈りのもとに新しく生きる者として造りかえられます。

パウロはこう語っています。「だから、キリストに結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。…神はキリストによって世を御自身と和解させ、人びとの罪を問うことなく、和解の言葉をわたしたちに委ねられたのでした」（第二コリント 5：17，19）。主イエスに反抗して悲しませてきた自分の罪を問うことなく和解の言葉を委ねられたパウロは、このときから異邦人伝道に仕えると同時に、異邦人とユダヤ人との間の架け橋となる働きに召されたのでした。

使徒言行録を読んでいると、どんなに人びとから反発を受け迫害を受けても、あきらめることなくキリストの福音を証しし続けるパウロの姿に教えられますが、しかしこのパウロの「あきらめない強さ」は、実は十字架の主の「あきらめない強さ」であることを私たちは知らされます。これだけ神に反抗してきた自分のことをあきらめることなく祈り続けてくださった主イエスの祈りがあったからこそ、パウロもまたあきらめずに証しする者とされていったのでした。

「今夜、一つの文明が滅びるだろう」と豪語して軍事侵攻を正当化する某大統領をローマ教皇が戒めると、それに猛反発した某大統領は自らをキリストに似せた AI 画像を SNS に投稿しました。自分こそキリストの代理者だということなのでしょう。権力者がここまで自分を神聖化し絶対化していく道を十字架の主はどのように見ておられるのでしょうか。しかし、その某大統領のことも主イエスはあきらめることなく祈っておられます。「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」と語りかける主の深い愛に碎かれ地に伏したパウロはその後、その主の愛に応える生き方に導かれましたが、その主の愛は今日も某大統領を含め私たちに分け隔てなく注がれているからです。世界は今、ため息ばかり、あきらめたくなることがあふれてますが、主イエスがあきらめておられない以上、私たちもあきらめないで祈り続けたい。祈り続ける主イエスの姿を見失うことなく、目を覚まして祈る信仰をいただいきたいのです。